



37 ふしぎなサンダル

(ペルーの昔ばなし)

むかし、インカ帝国の都クスコの王に仕える飛脚の中に、ウラチアという心優しい男がいました。

ある日、ウラチアは国境で戦う将軍に大急ぎで手紙を届けるよう命じられました。

途中でケガをしたおばあさんを見ると、彼は仕事をすっかり忘れて何日も看病しました。

別の飛脚が手紙を届け戦いには勝ちましたが、ウラチアは追放されてしまいました。

彼は何日も何日もさまよい、いつしか創造神の神殿にたどりつき、神に助けを乞いました。

「王はおまえを手ばなしたことで、おまえと同じぐらい悲しんでいる。」

「おまえは、これまで数々のよい行いをした。手助けに行きたいところへ一瞬にして行けるサンダルをやる。」

一瞬にしてクスコに戻った彼は、「もう一度飛脚にしてください。一番速く走ります。」といました。

喜んだ王は、六人の飛脚と競走させ一番になったウラチアを飛脚の長にしました。

それから彼は、仕事がすばやくできたので、困っている人や動物の世話を心ゆくまでできました。

猛スピードで駆け抜ける、やちこう男でした。

ローム君の新・博物日記 第37話

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

● **なじみ深いけれど珍しい昔ばなしです。**
この昔ばなしのように、「非常に速く走る男」の話というのは、他にもあります。また、魔法のサンダルのように、一瞬で願うところにたどり着ける魔法の道具まで範囲を広げると、魔法の絨毯や、空翔る馬など、似たモチーフの昔ばなしは多くあります。しかし、普通昔ばなしは何か類話があるのですが、この「ふしぎなサンダル」は、珍しく世界的にも類話のない、ペルー独特の話になっています。ただ私たちにとっては一読して大変受け入れやすい内容ですね。何故でしょうか？ その理由は、1) ずばぬけた能力、2) 弱いものへの親切、3) 魔法の道具、4) 主人公の最終的幸せという具合に、昔ばなしで好まれるいい要素をいくつも備えているからです。

● **昔は飛脚、今は駅伝 遠くまですばやく伝えます。**
昔ばなしでは、情報を次々と走って伝える伝令についての話でした。つつい駅伝を連想してしまいますね。それもそのはず。日本でも、江戸時代には街道や宿場が整備され、飛脚がリレーで手紙やモノを運ぶシステムができあがり、これが駅伝競技の原点だと言われています。駅伝は魅力と魔力が混在する競技。最大のポイントは、チームスポーツであるということ。一本のたすきをつなぐために、練習では決して出ない好タイムを出す選手が実際

第11回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会

広島市平和記念公園前スタート 協賛:ローム株式会社



ガンバレ選手諸君！
スタートは1月22日(日)12:30
テレビで応援しよう！

頑張るアスリートたちを応援しています。半導体のローム

にいます。逆に、プレッシャーに負けて、普段の力を全然出し切れない選手がいます。肉体的にも精神的にも自分に挑戦する長距離走であるからこそ、メンタル面がいっそう大きく影響するのだとか。次へと伝えていこうとする人の心。昔ばなしも、語り継ぐというタスキをつなげて、昔から現代にまで伝えられてきたんですね。

● **意外と知られていない、速く走るコツ。**
一口に「速く走る」と言っても、短距離走と長距離走では、動きも変わってきます。例えばヒザの上がり方。短距離は、ダイナミックな動きで、地面に大きな力を加えて大きなパワーを出します。ヒザは高く上がり、腿は水平近くまで上がっています。逆に長距離はヒザを上げず、体への負担が少ないフォームになります。このように走り方は違いますが、効率よく走るための重要な共通点がひとつあります。それは、「足を重心の真下に着地させる」こと。重心の前に足を着地させると、その分、前に進む力を殺すようなブレーキが働きます。長距離走のときはさらに、体への負荷にもなります。重心の真下への着地は、このようなロスを最大限に減らすのだそうです。昔ばなしの主人公にとっての最大のロスは、心の優しさだったわけですが。

昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫
取材協力/ミス/株式会社 スポーツプロモーション部 次長 中村哲郎

